文芸

俳句

蚊柱にニアミスの無き不思議かな　池田　逸子

杉の香の風の和みや蝸牛　伊藤　敬子

黒部ダム飛沫く欄干虹の上　今関満喜子

新緑をひと枝飾り風を呼ぶ　魚地　照子

さみだるる駅に一会のひと送る　江森　悦子

昼寝する園児の寝顔ママの夢　大谷　武彦

本土寺の箱の句碑や苔の花　川島　孝夫

職人の昼寝上手や風の道　川島　通則

万緑や子等の呼び声木魂せり　向後　寛

昼寝覚め顔に新聞かぶり居り　越川せつ子

おおっぴら夏の醍醐の晝寝かな　越川　福子

そよ風に花びらゆれる蜘蛛の網　小松　藤男

苔の花仰ぐ堂宇の千社札　佐瀬　輝夫

花菖蒲織り布のごとく広がりぬ　宍倉　道子

大の字がくの字に変り昼寝覚む　鈴木とし子

良き夢の続きとだえて昼寝覚む　鈴木　利子

信心のうすさ憂える鬼灯市　玉虫　栗扇

昼寝ざめ静かな夕となっており　土屋美枝子

都会にも広き空あり三尺寝　土屋　義昭

浅草の鬼灯市にまぎれけり　戸村　静萃

道の駅あぢさい道路町おこし　西崎さち子

蜜柑もぐ汗の流れを手でぬぐふ　長谷川正子

青田風背中をおして行きにけり　早川　勇

短歌

さ緑の日毎濃くなるさ庭辺にうす紅の石楠花の咲く　吉岡　信子

耕耘機で刈られゆきたる蚕豆の吐息のやうな匂ひ漂ふ　八角　三枝

しとしとと降りつぐ雨に庭隅の青き紫陽花色の深みく　鈴木まさ子

停車中の電車の窓より目に追ひぬ走る鼬の小さき背中を　西山満里子

膝を撫で膏薬貼るを遺影の夫「畑仕事はほど程」と笑む　青木　秀子

梅雨に入り畑豊かに潤ひて南瓜の蔓は畝を越へゆく　押尾　輝子

そぼくなる昔ながらの真桑瓜初なりと言ひ友の賜へり　田崎　尚美

けふ植ゑし胡瓜の苗にも注ぎゐむ夜を音たて雨の降りきぬ　芹川　初子

濡れ傘を干すと逆さに吊せしを揺らしゐるなりたまさかの晴　佐瀬　初音

一袋二百円に詰め放題海老にのばせる人の手激し　池田　春江

長病める友の病もよくなりて今日は笑顔で迎へくれたり　平山　芳子

樟若葉そよ吹く風に香りゐる新宿御苑の朝園巡る　斉藤つね子

……

草取りの疲れかいつしかうたたねの思いだせずに束の間の夢　土屋　好

若き日は昼寝もせずに働きし今は悠々自適の生活　伊藤　定男

田舎にて親の法事で弟妹と久々集まり懐かしあふる　鈴木　益郎

梅雨晴れ間夕日に映ゆる青田風鴨のつがいかゆるりと泳ぐ　高梨　キヨ

こうほう博物館 29

篠本城跡のお歯黒壺

遺跡を発掘していると、たまに奇妙なものが出てきます。今度紹介するのは、平成五年から九年まで発掘調査された篠本城跡から出土した、多くの陶磁器の中のユニークなひとつです。

写真の器は、丸い胴が少し潰れたようになり、頸がすぼんで立ち上がり、口が少し広がってその一部が鳥の嘴のように突き出た形をした、高さ9・5㎝、径11・6㎝の、小さな壺です。色はこげ茶色で胎土は粗く、表面はざらざらしているところから、常滑で焼かれた鳶口壺と呼ばれる、鎌倉時代の焼き締め陶器です。この器は真っ二つに割れて、はなればなれで出てきました。これを取り上げて水洗いして合わせたところ、ピタリと合わさりました。

ところでこの器がなぜ奇妙かと言うと、水洗いしたところ、内側の表面に厚く鉄錆が付着していました。この鉄錆が器に付着している例を調べたところ、元はお歯黒（鉄漿）壺であったことが分かりました。お歯黒は水に溶かした鉄錆に柿渋を混ぜて作った物で、歯を黒くするのに使われたことから、こう呼ばれました。初めは京の公家が付けていましたが、中世になると武士がそれをまねて付けたといわれます。つまり篠本城にいた武士が、京の文化を取り入れてお歯黒を付けたのでしょう。この壺は内面についた鉄錆によって、お歯黒を入れたお歯黒壺に使った事が分かった例です。篠本城跡からはこのほかに、異なった器を利用したお歯黒壺が、二点出土しています。

▲出土した奇妙な“お歯黒壺”